琥牙寮の愉快な仲間達

専学

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
琥牙寮の愉快な仲間達

【Ｎコード】
Ｎ３１０１Ｌ

【作者名】
専学

【あらすじ】
ここは翡翠学園の学生寮。でも、普段の学生寮とは一味違う。何故なら、この寮の管理人は学生がやっている。しかも、この学生寮に住む住人たちも変わっている。武道家？にストーカー？、その他にも侍？や、忍者の末裔？。一体この学生寮はなんなんだ？
この話は「ようこそ翡翠学園」の同じキャラ達が出てきます。また、揚羽ルートではないのでご了承ください。

人物紹介（前書き）

新しいのが始まりました。今まで「ようこそ翡翠学園」を読んでくれた方も新しく読んでくれる人もよろしくお願いします。

人物紹介

人物紹介

琥牙大河（こがたいが）

翡翠学園の二年で、琥牙寮の管理人。一応、この小説の主人公で、何かと周りのメンバーに振り回されている。

格闘スタイル「拳」

聖純揚羽（きよずみあげは）

翡翠学園の三年で、大河の姉貴分。翡翠学園最強の称号を持つ人物、過去に大河と一度だけ戦い引き分け、それからというもの、大河達と行動を共にしている。いずれ、大河と決着をつけたいと思っている。

格闘スタイル「拳」

聖純鈴（きよずみりん）

翡翠学園の二年で、大河の幼馴染。聖純揚羽の妹、でも揚羽とは血は繋がって無い。鈴の両親が死に、鈴の母方が聖純院の師範の娘だったため、聖純院に引き取られた。しかし、何を考えてか、今は琥牙寮に住んでいる。

格闘スタイル「トンファー」

朝瀬優燈（あさせゆうひ）

翡翠学園の二年で、同じく大河の幼馴染。琥牙寮の住人で、昔、大河が苛めから助けたおかげが何かと大河の彼女になりたくアプローチを掛けてくる。

格闘スタイル「銃」

祈植渚（いのうえなぎさ）
翡翠学園の二年で、フランスからの転校生。親の産まれた地を見たく日本にやってきた。負けず嫌いのせいか、何かと大河に絡んでくる。
格闘スタイル「木刀」

宇羅夜音葉（うらやおとは）
翡翠学園の一年で、大河の後輩。入学式の時、たまたま大河と出会い、琥牙寮の住人もあって、良く話などをしている。また、忍者なの末裔のせいか、薬の常識がすごい。
格闘スタイル「くない、針、薬、他多数」

伊瀧龍（いせりゅう）
翡翠学園の二年で、大河の親友。子供の頃、親の虐待を受けていた時に大河に助けてもらい、その頃からいつも一緒に遊んでいる。

江川剛（えがわつよし）
翡翠学園の二年で、大河の喧嘩仲間。中学の頃、不良どもにリンチされている所に大河に助けられ、それからというもの大河とつるんでいる。

瀬詩透（せしとおる）
翡翠学年の二年で、大河の友達。中学の頃、引きこもりをやっていたが大河に無理やり外に連れ出され、仲間になった。でも、影が薄く最近作者に忘れさられている。

いっつも最後に損をするのは主人公です（前書き）

初めまして。文章は下手ですけど。最後まで読んでくれたら嬉しいです。

いっつも最後に損をするのは主人公です

ここは琥牙寮。俺が管理人をしている建物だ。
何故、まだ学生の俺が管理人をしているのかというと。この琥牙寮は元々俺の家なのだ・なら俺の親が管理人をすればいいという話になるんだが、親は仕事で世界を回っている。だから。その代わりで俺が管理人をしているということだ。
今、そこの中庭で俺は四人の少女を相手に稽古をしていた。
いや、強制的に稽古を手伝わされていた。
「はあああああっ！！！」
祈植渚が俺に向けて木刀を振り下ろしてくる。
「まだ、気を集中させるのが荒いな」
「いたっ！」
俺はそれを避け、渚のでこにデコピンした。
「これで、5回目」
いい感じに赤くなってきたな。
「隙あり！！」
俺がおでこを押さえている渚を見ていると次は鈴が俺の背中をトンファーで殴ってこようとする。
「あほ、大声を出せば気付かれるだろう」
「あいた」
俺はすぐに振り返り、トンファーを掴み、鈴の頭にチョップをする。
「鈴はこれで6回目だな」
「なら、これは避けられる？」
優燈は俺が鈴に気を取られている内に、真上から二丁拳銃で撃ってきた。
どんだけ、ジャンプ力あるんだよ。
「ついでです！」

そしたら、今度は渚が俺をめがけ全範囲にくないを投てきしてくる。
「ちっ！」
逃げ道を塞がれた。
俺は舌打ちをした。
その瞬間、銃弾とくないが俺に襲ってきた。ちなみに、鈴はぎりぎりの所で逃げている。
俺の周りには砂煙が立ち込める。
「やったか？」
「いや、まだでしょう？」
「ん、大ちゃんはこれぐらいじゃ倒せないよ」
「みなさん、煙が晴れますよ」
四人とも、それぞれまた武器を構え始める。
ふうー、さてそれじゃあ、体も温まってきたし、やりますか。
「いつまで、そこを見ているんだ？」
「「「「え？」」」」
俺は煙が晴れる前に動いた。
「ぐふっ！」
そして、みんなが俺に気付く前に渚の脇に一発拳低をいれる。
「まず一人、次」
俺は鈴に向かって飛んだ。
「はあああああ、聖純流奥義　炎双翼、交差！」
鈴は俺にタイミングを合わせて、左右から殴りかかってきた。
「よっと」
「なっ！」
しかし、俺は攻撃が当たる前にそれを回避し、鈴の後ろに回り込んだ。
「これで2人目」
「がはっ」
そして、鈴が振り向く前に首筋に一撃を入れる。

「大河さんっ！！」
音葉がくないを構えて、俺に体術を挑んでくる。音葉の体術はスピードやキレがあり、避けるのが大変だった。
ん～、音葉はいい感じに強くなってきているな。でも、
「やあああああ！」
「お前はまだまだパワーが足りないな」
音葉が俺の顔面を狙ってきた、蹴りを放ってきた時に俺は右腕だけでガードした。
「おりゃあああああああ」
「きゃあ」
そして、そのまま足首を掴み投げ飛ばした。
「3人目終了。後は」
「私だよ」
いつの間にか、優燈に後ろを取られて背中に拳銃を突きつけられていた。
「気配を消すのがうまくなったな」
俺は手を上げて優燈に話しかける。
「ん。大河をストーカーする為にかなり練習した」
あまり、そうゆう物には使ってほしくないな。
「大河。降参して。これ以上は大河に銃口を向けたくない」
「あっそ、ならこうしよう」
「えっ！」
俺はしゃがんで優燈の銃を蹴りあげた。
「くっ」
優燈すぐにもう片方の銃を俺に向けようとする。
「甘い」
でも、俺はすぐに優燈の手を取り、優燈を拘束した。
「もっと、強めに拘束して」
優燈が変なことを言ってきたが無視をしよう。
「はい、終了～」

龍はそれを見て合図をだした。
俺はその合図と共に、優燈の拘束を解いた。
「剛、透。それぞれ渚と音葉の手当て」
そして、見学していた剛と透に指示を出す。
「ほれ、鈴。起きろ」
そして、俺は鈴を起こした。
「あ、大ちゃん」
鈴はすぐに気がついた。
「そっか、また負けたんだ」
鈴は周りを見ながら気がついた。
「いてて、まだ、体が痛いや」
「あまり無理はするな。急所は外したけど思いっきり蹴り飛ばしたからな。龍、鈴の手当てをしてくれ」
「わかった」
俺は龍に鈴の手当てを頼んだ。
さて、そろそろ、昼飯の準備でもするかな？
「なあ、大河。聞きたいことがあるんだが」
そう思っていた矢先に渚が話しかけてきた。
「なんだ？」
「あの全方位にくないが飛んできたとき、どうやって避けたんだ？」
「ああ、あれ？コガリュウにある防御技を使った」
「そんなものもあるのか？」
「ああ、名前は鉄界（てっかい）っつって、体を鉄のように硬くする技だ。だから、くないも銃弾も全部防げたわけ」
まあ、でも服はぼろぼろなんだけどね。
「ふむ、そうなのか。コガリュウにはいろいろな技があって便利だな」
「まあね」
「アゲハ先輩と戦ったら勝つかもな？」
「まさか、俺が本気でやっても引き分けまで持っていけるかわから

ないのに？勝てる見込みなんてないだろ」
「そうか？私的には大河は昔より強くなったよ思うぞ？」
そしたら、後ろから話しかけられた。
「あはは、俺なんて姉さんに比べればまだまだだよ」
・・・・・って、待てよ俺。今、誰と話した？
俺はゆっくりと後ろを無理向くとそこには仁王立ちをし、にっこり笑っているアゲハが腕を組みながらたっていた。
「よう、弟。実に面白いことをやっているじゃないか。私も混ぜてくれよ」
「俺これからみんなの昼飯を用意しないといけないので、ぬけるね」
そう言って俺はすぐに建物の中に入ろうとした。
「まあまあ、そう言わずにさ」
揚羽は俺の襟を掴んだ。
「最近、私も稽古らしい稽古をしていないんでね。付き合ってくれるよな。つか、付き合え」
揚羽はそう言って、そのまま、俺を引きずって行った。
「嫌だあああああ！！！」
その後、俺の叫び声が周りに響いた。

いっつも最後に損をするのは主人公です（後書き）

感想や誰のルートにしてほしいかなどの希望をお待ちしております。

強くなりたい理由

「大河、今日こそ貴様に勝つ」
昼休み、俺が昼食を食べていたら渚が俺に木刀突き付けながら言ってきた。
この頃、渚は俺に負けたのがそんなに悔しいのか、毎日、挑戦してくる。
「鈴、パス」
俺は弁当を食べながら鈴に押し付けた。
「え？いらない。優燈にあげる」
「私もいらない、だから、大河に返す」
２人供俺が作った弁当を食べながら断った。
つか、俺に返ってきたな。
「え？俺もいらないんだけど」
「貴様らいい加減にしろ。というかだな、大河、私はお前に言っているんだぞ」
とうとう、渚が苛立ち始めた。
「つか、渚、人に木刀を向けるな。行儀が悪い」
「ああ、これはすまぬ」
渚はすぐに木刀をしまった。
「じゃなくて、大河、私と勝負しろ」
ちっ、話を逸らすことはできなかったか。
「嫌だ」
俺は断った。
昼休みぐらいゆっくりさせてくれよ。
「なら、放課後。一戦だけ」
渚は諦めきれないみたいで言ってきた。
「そんなに俺と戦ってどうするんだよ？」
毎日毎日飽きないよな。

「強くなりたい」
渚はすんなり言ってきた。
「私は強くなって世界を旅したいんだ。その近道として私はお前と戦って強くなりたいんだ。だから、私と放課後でもいいから戦ってくれ」
「あっそ、頑張れ」
俺は弁当を食べ終わり、いつも通り屋上で昼寝しようと思い移動した。
「おい、ちょっと、待て」
渚は俺の手を掴んだ。
「何？」
「普通そこは私に協力してくれるところだろ」
「興味ない」
「なんだと」
「それに、強くなりたいなら俺じゃなくても姉さんとかとやればいいだろ」
あの人は俺より強いだろ。
「揚羽先輩に言ったら、『私に挑戦したいならまず、大河を倒してからにするんだな』と言っていた」
姉さん、なんで俺の名前を出すかな？
「だから、私と戦ってくれ」
「断る」
俺は手を振りほどいて、歩き出す。
「待てって言っているだろう」
渚は俺の後ろを付いてくる。
「なんで貴様は私のお願いを断るんだ？」
「じゃあ、聞くがなんで俺がお前の強くなる為に協力しなきゃいけないんだ？」
「お前が強いからだ」
ただ、それだけの為かよ。

「俺より姉さんの方が強い」
「でも、先輩には断られた」
「俺も断ったが」
「先輩が『大河は何度も頼めば結局、了承してくれる』と言っていた」
「じゃあ、今回は全部断ってやる」
俺と渚は屋上についた。
「それは困る。私が強くならないじゃないか」
「ならなくていいだろ」
俺はベンチに横たわり、早速寝る準備を始めた。
「貴様は私にこのままずっと弱いままでいろと言っているのか？」
「そうゆうことじゃない、俺が言いたいのはそんなに急いで強くならなくてもいいだろってこと」
「急いで？私には遅いくらいだ」
「だから、俺が言いたいのは」
「もういい！とにかく、今日の放課後、戦ってもらうからな」
渚はそう言って屋上から出て行った。
「やれやれ、結局やらされるのか」
さて、五月蠅い奴もいなくなったし寝るかな。
「いいのか、渚を追わなくて？」
いつの間にか、揚羽が隣のベンチに腰を掛けていた。
でも、俺はあまり驚かない。
「姉さんどこからでてきたの？」
「まあ、そんな細かいことは気にするな？それより、あのまま渚をほっとくとやばいぞ」
「だね、修羅道に足を突っ込みかけている」
昔の俺や姉さんみたいに。
「それで、お前はどうする気だ？」
「さあね、なるようになるでしょ」
「だな」

さて、寝ようか。
こうして、俺は眠りに付いた。

新技を作ってみるか

「それじゃあ、始めるぞ」
龍が俺と渚を見ながら言ってくる。
「ああ、いつでも」
「ＯＫ」
俺は渚に付きあって、手合わせをしていた。龍には審判をしてもらっている。
「今日こそ貴様に勝つ」
渚は宣戦布告をしてきた。
「へいへい」
俺は軽くあしらった。
あ～、めんどくせー。
「それじゃあ、始めっ！」
「はあああああああ」
渚は龍の合図と共に襲いかかってきた。
「はあっ、やあっ、おりゃっ」
右、左、下など次々と木刀を降ってくる。
「・・・・・」
俺はそれを無言のまま意図も簡単に避けていく。
「とりゃあああああ」
今度は頭を狙い木刀を振り下ろしてくる。
「よっと」
俺はそれを避け、足で木刀を踏んづけ、渚の顎に向けて裏拳を仕掛けた。
「甘いっ！」
渚はそれをしゃがんで避け、そして、そのまま足払いをしてきた。
「おっと」
俺はそれを後ろにジャンプして避けて、距離を取った。

「よし、準備運動はこれぐらいでいいだろ」
渚はそう言って木刀を構えなおした。
「次からは本番だっ！」
そして、木刀に気を纏わた。
「祈植剣術　六の太刀　千鳥（ちどり）」
そして、そのまま特攻をかけてくる。
んじゃ、俺もやりますか。
「琥牙流奥義　雲騙し（くもだまし）」
「遅いっ！」
俺が技を発動させようとした瞬間、渚の木刀が俺の胸に当たろうとした。
渚は技が当たったと思ったが、
「外れ」
「なっ」
しかし、渚が貫いたのは俺の残像で、本当の俺は一瞬の内に渚の後ろに回っていた。
「重技　鎌切」
そして、そのまま渚の脇腹に回転蹴りをした。
「ごは」
渚は横に飛んだ。
自ら横に飛んで威力を消したか。
「やはり、強いな。そうでなくちゃ」
渚は痛みを堪えながら木刀を構えた。
「でも、まだまだこれからだ」
渚はまた特攻をかけてくる。
「行くぞ　祈植剣術　七の太刀　十字幻斬（じゅうじげんざん）」
「なっ」
渚が技を放った瞬間、俺は驚いた。
上下左右正面から斬撃が襲ってきたのである。
「ぐっ」

俺はそれを避けることが出来ずにモロに喰らってしまった。
「どうだ。私の新技は」
渚は嬉しそうに言ってきた。
なるほどな、気を残影代わりに使い、相手の避ける進路を絶ちなおかつ相手に一撃を入れる技か。だから幻斬か。
「なかなかいいな」
俺は思わず褒めてしまった。
う～ん、渚も新技を作ったことだし俺も新技作ってみるかな？えっと、さっきの渚の技の基礎を基盤してみるから、気を俺の全身に纏わせる。
俺は全身に気を纏わせた。
・・・・・さて、いっちょ、やってみるか。
「よし、行くぞ」
俺は構えた。
「来い」
渚は俺の気を感じたのか、木刀を構えなおした。
「琥牙流奥義　蜃気楼」
俺はそのまま渚に突っ込んだ。
「甘い」
渚はそのまま迎え撃った。
「なっ」
しかし、そこには確かに俺の実態があった筈なのに木刀が振り下ろされた数センチ手前に俺がいた。
「俺の勝ちだ。琥牙流奥義　零距離弾（ゼロキョリショット）」
そして、俺は渚の脇腹に拳を放った。
「がはっ」
渚はそれを見事に喰らい、飛ばされてしまった。
そして、そのまま倒れてしまった。
・・・・・やば、手加減できなかった。
「そこまで、勝者　琥牙大河。って、渚が気絶してるじゃん」

龍は高々と宣言した。
「うん、手加減できなかった」
「どうすんだよ？」
「俺がおぶって寮まで運ぶよ」
「じゃあ、俺は荷物を持つよ」
「ああ、頼むよ」
俺は荷物を龍に預け、渚をおんぶし歩きだした。
この後、渚が目をさまして、また、勝負しろと言ってきたのはいうまでもない。
いや、マジ勘弁して。
私が勝つまでやるんだ！！　　ｂｙ　渚

出会い

夕日の日差しが差し込む放課後の学校。
死のう。
小学校の私はそう思い屋上に繋がる階段を上がっていた。
私は苛められている。
いつからか、わからないが、気が付いたらそうなっていた。
始めの頃は、無視をされたり、物を隠されたりだった。
でも、最近では靴を捨てられたり、教科書を刻まれたり、机に死ねを書かれたり、などなどエスカレートしてきた。
親にも相談しようと思った。でも、もしこのことを相談するともっと恐ろしいことをやってやると脅されたため相談できないでいる。
私は屋上の扉を開け、屋上に出た。
「よかった。誰もいない」
私は周りを確認して誰もいなかったことに安心した。
誰かいたら邪魔されるかもしれないしね。
私は飛び降り防止フェンスを乗り越え、向こうの方に立った。
「今日でこの景色ともお別れか」
私は少し寂しくなったがつらい思いをするよりはましだった。
「お父さん、お母さん、ごめんね。先に逝く私を許してね」
私は決心が揺るぐ前に飛び降りようと一歩踏み出そうとした。
「ん～、止めはしないけど、死んだって良いことないよ？」
そしたら、いきなり後ろから声をかけられた。
私は驚いて振り向こうとした。
「「あっ」」
そしたら、そのままバランスを崩して落ちてしまった。
これで、私死ぬんだ。
私、そう悟り目を瞑った。
「・・・・・」

しかし、いつになっても体中に衝撃がこない、それどころか誰かに片手を掴まれている感触がした。私は不思議に思いゆっくりと目を開けた。そしたら、そこには左眼に眼帯をした少年が私の肩手を掴んでいる姿があった。
「何かあったが知らないけど、目の前で飛び降り自殺を見さられちゃ寝起きが悪いよね」
少年は苦笑いをしながら、私の肩手を掴んでいた。
「は、離して！」
私は少年に向けて大声で言った。
「なんでさ？離したら死んじゃうよ？」
少年は冷静に答える。
「私は死にたいの！」
「じゃあ、なおさら離せないよ」
少年の腕に力が籠るのがわかる。
「ど、どうして？」
「どうしてって、俺がここで手を離したら俺が君を殺したようなもんじゃない」
「じゃあ、助けなければいいじゃない」
「知らないよ。勝手に体が動いたんだから」
「勝手にって」
どうして？初めて会った私を助ける意味なんてないのに。
「ところで、そろそろ引き上げていいか？って、引き上げるなって言われても引き上げるけどねっ！」
少年はそう言って私を軽々と引き上げた。
「よっと」
そして、そのまま私を抱き上げて転落防止フェンスを乗り越えた。
「とりあえず、これで安心かな？」
そう言って、私をゆっくり下ろしてくれた。
私はその場にしゃがみ込んでしまった。
「さて、もう遅いし帰るか。お前はどうするの？」

少年はのんびりと私に言ってくる。
「えっと」
私はそこで言うのを躊躇ってしまった。
せっかく、助けてくれたのにもう一度、自殺するなんて言えない。
「・・・・・私も帰るよ」
今日はもう無理だなと、私は思った。
「じゃあ、一緒に帰るか」
少年は私に手を差し伸べてきた。
「う、うん」
私は少々、顔を赤くして手を掴んで立ち上がった。
「じゃあ、行くか」
「うん」
そして、少年は歩きだした。私もその後ろについて行く。
「あ、そうだ。お前の名前ってなんて言うんだ？」
少年は階段を降りながら聞いてきた。
「名前？」
「そう、名前。と、その前に俺から言わないとな。俺は琥牙大河。お前は？」
「私は優燈。朝瀬優燈」
これが私と大河の始めての出会いだった。

「ん、朝か」
私は時計を確認しながら意識を覚醒させた。
久々に懐かしい夢を見たな。
あの時、私が大河に助けられなかった、私はここにはいない。大河は私の命の恩人なのだ。今の私は大河の物。いや、正確に言えばあの時、助けられた時に私の命は大河の物になったのかもしれない。だから、私は大河に身も心もささげる。
このことを大河に言ったら大河に怒られるかもしれないのでこの

ことは黙っておこう。
私は静かに隣を見た。
隣ではまだ大河が眠っている。
なんで、隣で大河が寝ているのかというと、私が大河の布団に忍びこんだのである。
この後、すぐにここから脱出しないと、大河に怒られてしまう。
だから、私は大河を起こさないように布団から出た。
「あ、忘れる所だった」
私は部屋を出ようとした所で、朝の日課を思い出した。
「大河、愛してる」
私は軽く大河の唇に自分の唇を重ねた。

大河、愛している　ｂｙ　優燈

友人でお願いします　ｂｙ　大河

苦手な物は何？（前書き）

鈴視点です

苦手な物は何？

「なあ、大河の苦手な物ってなんだ？」
昼休み、あたしは教室で渚と優燈と一緒に昼食を食べていたら、渚が質問してきた。
「大ちゃんの苦手な物？」
あたしは大ちゃんが作ってくれた、あたし用の弁当を食べながら聞いた。
ちなみに肉が多めだ。
「ああ、そうだ」
渚は購買で購入してきたサンドイッチを食べながら頷いた。
ちなみに渚は大河が作った弁当は十分休みの内に食べ終わったそうだ。
「大ちゃんの苦手な物ね。優燈、知っている？」
あたしは黙々と、大河が優燈用に作った弁当を食べている優燈に聞いた。
優燈の弁当は野菜が中心の為か色鮮やかだ。
「んー、そういえば私も知らない」
優燈は静かに答えた。
「そうか、それは残念だ」
渚は残念そうにしていた。
「なんでそんなことを知ろうとした？」
「いや、何、あいつはを見てみるとなんだか完璧すぎる気がしてな。何か弱点みたいなものが無いかなと思っただけだ」
確かに、あたしも大ちゃんと15年一緒にいるけど、大ちゃんが苦手な物とかよく知らないな。
「ところで、渚。大河の苦手な物を知ってどうするき？」
「いや、何、ちょっと、あいつと稽古する時、苦手な物を知っていれば少しは有利になるかもしれないと思ってな」

「そんなこと私がさせると思う？」
優燈はどこからともなく拳銃を取り出し構えた。
てか、なんで臨戦態勢になっているの？
「思わないな。でも、食後の運動がてら相手をしてやってもいいぞ」
渚もどこからともなく木刀を取りだした。
「今日で１０敗目の記念にしてあげる」
「たわけ、それは私のセリフだ」
渚と優燈はそう言って外に飛び出した。
「あー、行っちゃた」
あたしは窓を見ながらそんなことを思った。
「おいおい、何の騒ぎだよ」
「あ、大ちゃん」
そしたら、コンビニ袋を片手に持った大河が教室に入ってきた。
「えっと、優燈と渚が食後の運動がてらに稽古中」
「ははは、あいつらも元気だな」
大河は苦笑いをしながら、あたしに近くまでやってきた。
「そういえば、さっき爺さんに肉まん貰ったんだが食べるか」
大河はコンビニ袋から肉まんを一つ取り出しあたしに差し出した。
「食べる！！」
あたしはそれを受け取り、がつがつ食べ始めた。
「まだ一杯あるからそんなに急いで食べなくてもいいぞ」
大河は袋から自分の分も取り出し口に含んだ。
「だって、肉まんって暖かい方がおいしいだもん」
「まあそりゃあ、そうだけどさ。って、ほら、ほっぺについてんぞ」
「大ちゃん取って」
「はいはい」
大河はあたしの言われるままにあたしのほっぺから食べカスを取ってくれた。そして、そのまま自分の口に運んだ。
「ありがとう」
「どういたしまして」

大河はそう言ってまた肉まんを口に含んだ。
「おい、みたかあれ」
「普通やんないだろ」
「あの2人ってできてんの？」
その光景を見た数人が何故か驚いている。
それもそのはずだ。誰だって男女がこのような事をやっていると付き合っていると思われる。
でも、あたし達は気にしない。だって、これはあたし達にとって普通のことだから。
「そういえば、大ちゃん聞きたい事があるんだけど。おかわり」
「なんだ？はい」
大河はコンビニ袋からまた肉まんをとりだしあたしに渡してくれた。
「大ちゃんの苦手な物ってある？ありがとう」
「俺の苦手な物？」
「うん」
「あるけど。なんでそんなことを知りたいんだ？」
「だって、大ちゃんはあたしの苦手な物を知っているのに、あたしは大ちゃんの苦手な物を知らないなんて不公平だと思ってさ」
あたしは肉まんを一口、口に含みながら言った。
「んー、まあ、鈴ならいっかな教えても」
「本当？」
「ああ、本当だ」
「じゃあ、教えて」
「わかった。俺の苦手な物は」
「苦手な物は？」
「お前の泣き顔だよ」
「へっ？」
あたしは大河の一言に呆気にとられた。
「えっと、大ちゃん。もう一回言って頂戴」

あたしの聞き間違いだよね。
「だから、俺はお前の泣き顔が苦手なんだよ」
やっぱり聞き間違いじゃない。
「えっと、とりあえずなんで？」
あたしは理由を聞いた。
「んー、単にお前の泣き顔を見たくないだけかな」
「それって苦手って言うの？」
「さあな。でも、ガキの頃、お前が泣き顔で頼みごとを俺にしてくると俺は大抵、断れなかったからな」
大河は頬を掻きながら言ってくる。
「たぶん、それは苦手とは違うと思うよ」
あたしは苦笑いをした。
「そうなのか？まあ、いいや。だから、お前はずっと笑顔でいろよ。俺はお前の泣き顔が苦手なんだから」
「うん、わかった」
あたしは頷いておいた。

大ちゃんはあたしの泣き顔が苦手なら笑顔はどうなのかな？　by　鈴

組手の途中の一言

「はあああ」
音葉がくないを構えながら優燈に向かって突っ込んでいく
「しつこい」
優燈はそう言って音葉に向かって銃を乱射する。
しかし、音葉はそれを意図も簡単に避けてしまう。
「貰いました！！」
そうして、そのまま音葉は優燈にくないを振り下ろした。
「狙撃手が長距離だけだと思う？」
「なっ」
しかし、優燈はそれを冷静に両手に持っている銃で受け止めた。
「すきあり」
そして、流れるように音葉のお腹に蹴りを入れる。
「ぐっ」
音葉はそのまま後ろに飛ばされてしまう。
「まだ、終わらないよ」
優燈は音葉の態勢が整う前に銃を乱射しながら追撃する。
「くっ」
「そこまで」
俺は音葉と優燈の間に入り、銃弾をすべて撃ち落した。
俺達は今、寮の中庭で稽古をしていた。
「音葉、大丈夫か？」
「はい。蹴られる瞬間に後ろに飛んで威力を殺しましたから。それにしても、優燈さんは強いですね」
音葉はくないをしまいながらゆっくり立ち上がった。
「そりゃあ、大河に鍛えられていますから」
優燈はそう言って俺達のところにやってきた。
「音葉、お前油断していたろ」

「正直にいうとそうですね。てっきり、優燈さんは遠距離だけだと思いました」
「大河が、今の時代、狙撃手は体術もできる方がいいって言ったからね大河に教えて貰っているの」
「へえ～、そうなんですか」
音葉はそう言って感心していた。
「ところで大河」
「ん？」
「もう少し、組手の練習がしたいから相手して」
「え～、でも、俺そろそろ夕食の準備をしないといけないしな
「それなら、私が作りますよ」
「あ、そう。じゃあ、頼むは」
「はい。わかりました」
音葉そう言って、寮の中に入って行った。
「それじゃあ、とっとと始めるか」
俺は拳を握り構えた。
「うん。そうだね」
そう言って、優燈も構える。
「よし、来い」
「はっ！」
俺の合図と共に優燈は拳を放ってきた。
「よっと」
俺はそれを避け、優燈に拳を放つ。
「おっと」
優燈はそれを避けた。
「それじゃあ、少しスピードを上げていくか」
「うん」
それから俺と優燈は拳や蹴りを混ぜながら交互に打ち合いながら。だんだんとスピードを上げていく。
「ねえ、大河」

「ん？」
俺と優燈はそれをやっていると、優燈が話しかけてきた。
「私、あの頃より強くなった？」
「ああ、強くなったと思うぞ」
あの頃というのは優燈が苛められていた頃だろ。
「お前が俺の弟子みたいな物になって六年経つのか」
「そうだね。でも、まだ大河から一本取ったことがないよ」
「そりゃあ、俺も一緒に強くなっているんだからな」
「それじゃあさ、私が一本取ったら私のゆうこと一つだけ聞いてくれる？」
「ああ、いいぞ」
どうせとれないと思うし。
「本当？」
「ああ、でも、肉体関係とか、付き合ってとかはなしだからな」
俺は念のために釘をさしといた。
こいつのことだから本当に言いそうだな。
「わかっているよ。私、大河の嫌がることしないもん」
その割には、勝手に俺の布団の中に入って来ているけどな。
「ねえ、もう一ついい？」
「なんだ？」
すげー嫌な予感がする。
「いつになったら私と付き合ってくれるの？」
やっぱりな。
「さあね？」
俺は簡単にはぐらかした。
「また、そうやって私の愛に答えてくれない」
誰が答えてたまるか。
「いいか、優燈。この世には俺よりもっといい男性が「いないよ」・・・・最後まで言わせろよ」
「大河より、いい男性なんていない」

今度は言い切りやがった。
「だから、私と「断る」ごふ」
俺は優燈が言い終わる前に優燈のお腹に拳を入れた。
「な・・・ん・・・で」
優燈は地面に伏せながら聞いてきた。
「すまん。それはまだ言えない」
「そ・・・ん・・・な」
優燈はそのまま気絶してしまった。
「ごめんな。優燈」
俺はそれを確認するとそのまま優燈を抱き上げた。
「本当はお前に答えてやってもいいと思っている部分もある。でもな、俺はまだ自分を一人前と認めていないんだ。だから、もし、俺が一人前になって、まだ、お前が俺の事を好きなら、その時は・・・・・結婚しよう」
・・・・・って俺は何を言っているんだ?
「結婚の以前に付き合わなきゃいけないのにさ。あー、恥ずかしい」
俺は今頃になって自分がすごいことを言ったのだと気が付いた。
「大河さん夕食ができました」
「ああ、わかった」
音葉が呼びに来たので俺は優燈を抱えたまま、寮の中に入って行った。
俺はこの時、知らなかった。
優燈がちゃっかりテープレコーダーに俺がさっきの言葉を録音していたなんて。

大河、私はいつまでも待つよ。そしたら結婚しようね　ｂｙ　優燈

管理人なった理由と挑戦者（前書き）

お待たせしました。

管理人なった理由と挑戦者

「え～と、買い残しはないな」
俺は買い物レシピを確認しながらスーパーを出た。
「あ、大河さん」
「ん？」
俺は声をかけられた方を見ると音葉が制服姿で紙袋を持ちながら俺に近づいてきた。
どうやら、音葉は学校帰りのようだ。
「よお、今、帰りか」
「ええ、本屋に立ち寄って少し読書していました。それで、ついでに本を何冊か買ってきました」
なるほど、あの紙袋の中身は本か。
「大河さんも、今帰りですか？」
「ああ、そうだ。晩飯の食材が無くなりそうだったからな。ついでだし、一緒に帰るか」
「はい。そうしましょう」
こうして、俺と音葉は一緒に歩き出した。
「ねえ、大河さん」
「ん？」
しばらく、黙って歩いていると音葉が話しかけてきた。
「少し聞いてもいいですか？」
「ああ、いいよ」
「なんで、大河さんは管理人をやっているんですか？」
「俺が管理にをやっている理由？」
「はい」
「んー、と確か」
回想中
「大河、お前も明日で中学を卒業だよな」

俺が技の型の確認をしていたら、親父が話しかけてきた。
「ん、そうだけど？それがどうしたんだ」
「実はな母さんの会社の関係で父さんと母さん海外に行くことになったんだ」
「はい？」
今、なんつった。
「ということなので、お前を明日からこの琥牙寮の管理人に任命する。異論は認めない」
「ふざけんな！！」
俺はそう言って親父に殴りかかった。
「親に勝てると思うのか？」
そしたら、親父は簡単にそれを避け、カウンターとばかりに殴りかかってきた。
「当たるかっ！！」
俺は体を捻り、親父の顔面に蹴りを放つ。
「甘いな」
しかし、親父はそれをさっきの拳で受け止めた。
俺達はそれから、母親に止められるまで殴り合いを始めた。
回想終了
「ということがあって、俺が今、琥牙寮の管理人をしている」
くそ、あのクソ親父。今にして思えばムカつくな。
「お気の毒ですね」
音葉は苦笑いをしていた。
「なあ、君達。翡翠学園の生徒さんかい？」
「は、はいそうですけど。私達に何かようですか？」
俺達が話しながら歩いていると公園に差し掛かった。
そうしたら、胴着を着た男が内の高校の女子生徒に話しかけていた。
いかにも、怪しそうな奴らだな。そのせいか、少し女子生徒が怖がっているようだ。

「大河さん。あれ」
「ああ、わかっている。少し、様子見だな」
俺はとりあえず、音葉を止めて、様子を見ることにした。
「いや、君たちに用はない。ただ、ある人物のことを教えてほしいんだ」
「それって翡翠学園の人なんですか？」
「ああ、そうだ。名前は琥牙大河という」
「え、大河さんですか？」
「おお、知っているか」
「はい。琥牙大河さんですよね。私、この前、不良に絡まれていた所を助けてもらったんです」
「そんなことをしたんですか？」
音葉が驚きながら聞いてきた。
「ん？ああ、この前、帰っている時になんだか絡まれていた生徒がいたから助けてやった」
「大河さんって、結構、お人好しですよね」
「お人好しいうなよ」
俺達はそんな会話をしながら、視線を戻した。
「それで、なんでおじさんは大河さんを探しているんですか？」
「ん、実はな今日、俺は聖純煉磨に挑戦しに言ったんだ。そしたら、琥牙大河に勝ってきたら相手をしてもいいと言われてな」
じいさん。勝手に人の名前を出さないでくれよ。
「どうするんですか？」
音葉これからの行動について聞いてきた。
「どうするもこうするも、俺は夕食の準備をしないといけないからそんな暇はないぞ。音葉、お前がやってみるか？」
「いいんですか？あの人は大河さんに用事があるみたいですけど」
「いいよ。俺は興味ないし」
今の俺は夕食の準備の方が大切だ。
「わかりました。それじゃあ、後は私がやっておきます」

「わかった。それじゃあ、お前の荷物は俺が持って帰るから」
「あ、ありがとうございます」
俺は音葉から荷物を受け取った。
「それじゃあ頼むよ」
俺はそう言って音葉と別れ先に琥牙寮に帰った。
「はい頼まれました」
そして、音葉も公園の中に入って行った。

「それじゃあ、琥牙大河のいそうなところを教えて貰おうか」
「いいですけど」
「その必要はありません」
私はそこで声をかけた。
「あ、宇羅夜さん」
どうやら、話を聞かれていた人は私のクラスメイトだったみたいです。
「こんにちは」
私は愛想よく挨拶をした。
「後は私が引き受けるので、田中さんは帰っても構いませんよ」
「あ、そう。それじゃあ、後は任せるね。また明日」
「はい。また明日です」
女子生徒は私に挨拶してそのまま帰ってしまった。
「それで。誰だ、お前は？」
おじさんは私を睨みつけながら聞いてきた。
「私は宇羅夜音葉と申します」
「ふむ、その宇羅夜殿が俺に何の用だ？」
「話はすべて聞かせて貰いました。ようするに、あなたは大河さんを探しているんですよね」
「そうだ、あんたは知っているのか？」
「はい。知っています」

「そうか、なら」
「でも、あなたを相手にするほど大河さんは暇ではありません」
「なんだと！！」
おじさんは怒りをあらわにした。
「その代わりと言ってはなんですか。私がお相手いたします。私が勝ったらそのままお引き取り願います」
「俺が勝ったらどうするんだ？」
「もちろん、大河さんの所に案内いたします」
「よかろう、なら、早速だ！」
おじさんは私に向けていきなり拳を放ってきた。
「短気な人ですね。これじゃあ、大河さんに挑むどころか私にも勝てませんよ？」
「なっ」
私がいつのまにかおじさんの背後にいることにおじさんは驚いていた。
「くっ、ぬりゃあ」
おじさんは振り向き、また殴りかかってくる。
「それに、大振りですから簡単に避けやすい」
私は少しだけ、体を傾けさせそれを避けた。
「まず一発です」
私は相手の懐に拳を入れた。
「ぐおおお」
おじさんは痛みのあまりに膝をついた。
「どうします？まだ、やりますか？私的にはこれで負けを認めてくれると嬉しいんですけど」
「ふざけるな。俺はまだ戦える」
おじさんは腹を押さえながら立ち上がる。
「そうですか。それでは次で終わらせましょう」
「やれるもんならやってみろ」
おじさんはそう言ってまた殴りかかって来た。

「芸がない人ですね」
私はそう言って、また、おじさんの背後に回った。
「くそっ」
おじさんはそう言って振り向こうとした。
普通、そこは距離をとる所何ですけどね。
「宇羅夜流針術　一の型　縛」
その瞬間、私は隠し持っていた針をだし、おじさんのあるツボをついた。
「な・・・・に・・・・」
その瞬間、おじさんは動けなくなってしまった。
「これで、私の勝ちですね」
私は制服の埃を落としながら言った。
「俺に何をした？」
「針でツボをつかせてもらいました。約三時間は動けないでしょうけど。命には影響がないので、そこはご了承ください。それでは私はこれで失礼いたします」
私はそう言って歩き出した。
寮に戻った頃には丁度、夕飯もできたみたいで、私はそれを大河さん達と一緒に頂きました。あと、大河さんからお礼だというばかりに少し、多めにおかずを盛ってもらったことはみんなには秘密です。

大河さんが管理人なった理由を聞けて良かったです　ｂｙ　音葉

子犬を拾ってきた

「大河」
「ん？」
俺が料理の本を眺めながら今夜の晩御飯を何にするか考えていたら、後ろから渚が話しかけてきた。
「実は相談したいことがあるんだが」
「相談？」
俺が本から眼を離し、渚の方を向いた。
「おい、渚。それはどうしたんだ？」
そしたら、渚が子犬を抱えていた。
「拾った」
渚は堂々と言った。
「拾っただと」
「ああ、今日は遠回りをして帰ろうかなと思って川岸の所を歩いていたら、段ボールの中に捨ててあった。しかも、段ボールには拾ってくださいと書いていたので拾ってきた。それで、大河飼っていいか？」
「だめ」
俺は即答した。
「何故だ！！こんなにも可愛いんだぞ」
「お前、きちんと世話できるのか？ご飯を買う金は？家は？俺達が学校に行っている時に誰が世話するんだ？」
「そ、それは」
「考えもなしに拾ってくるんじゃない」
俺は最後にきつい一言を言った。
「た」
「た？」
「大河の馬鹿あああああ」

そう言って、渚は俺の事を馬鹿よばわりして自分の部屋に戻って行った。しかも、きちんと子犬を連れて行った。
「なんで、俺が馬鹿呼ばわりされなきゃいけないんだ？」
・・・・・はあ、少し言いすぎたかな？まあいいや、とりあえずあいつに連絡しないとな。
俺はそう思い、携帯を取り出した。

私が子犬を連れて来て、三日が経過した。
「それで、まだ、大ちゃんは子犬を飼うのを反対しているの？」
鈴は子犬を撫でながら言ってくる。
「いや、何も言ってこない」
私と鈴は、外で子犬と戯れながら話をしていた。子犬にはとりあえず太郎と名前を付けた。首飾りとご飯とトイレも買ってきた。犬小屋は龍に頼み作って貰った。
「しかし、なんで大河はペットを飼うのを禁止にしているんだ？ペットは嫌いなのか？」
「いや、あたしは逆だと思うよ」
「逆？じゃあ、大河は動物を好きなのか？じゃあ、なんで飼ってはいけないんだ？」
「えっとね、それは大ちゃんの性質のせいなの？」
「性質？それはどういうことだ？」
犬アレルギーでもいうのか？
「怖がらせんだよ」
そしたら、大河が寮の中から話しかけてきた。
「びっくりした」
私たちはいきなり話しかけられた為、驚いてしまった。太郎も驚いたのか、鈴の後ろに隠れた。
「怖がらせるとはどういうことだ？」
私は大河に聞いた。

「そのままの意味。俺は何故か知らんけど動物に怖がられんだよ」
「それは本当なのか？」
私はにわかに信じれきれなかった。
「本当だよ。小学校の頃、遠足で動物園に行った時に、動物が一匹も出てこなかったんだ」
鈴は顔を背けながら言ってきた。
この鈴の反応からして本当だろ。
「でも、お前の体質のせいで寮でペットを飼っていけないのは変な話だろう。というか、それってどう見ても公私混同だぞ」
私が大河に怒りを覚えながら叫んだ。
「わかってる。だから、ほれ、これを渡しにきたんだよ」
そう言って大河はプリントを私に渡してきた。
「なんだこれは？」
「俺の知り合いがやっている奴が獣医でね。そこの予防接種のお知らせのプリントだよ」
「え、てことは飼っていいのか」
「ああ、ただし、条件がある」
「条件？」
「きちんと最後まで面倒を見ること。俺に近づけさせないこと。この二つだ。できるよな？」
「ああ、もちろんだ」
「よかったね。渚」
鈴は嬉しそうに言ってきた。
「ああ、そうだな」
「それじゃあ、俺は買い物に行ってくるからな」
「あ、ちゃと、待て、大河」
私は去ろうとした大河を呼び止めた。
「ん、なんだ？」
「ありがとう」
「どういたしまして」

そう言って、大河は買い物に出かけって行った。
「さて、太郎。大河も認めてくれたし今日からお前は私の家族だ。よろしくな」
「ワンッ！！」
私はそう言いながら太郎の頭を撫でると、太郎は元気よく吠えた。
この後、太郎を予防接種に連れていこうとしたら、太郎が逃げ出したのは言うまでも無い。

大河も一緒に散歩に連れていけば怖がれないと思うんだがな。

by　渚

子供の世話は大変だ　前編（前書き）

更新遅れて本当に申し訳ありません

子供の世話は大変だ　前編

「えっと、姉さん」
「ん？なんだ弟よ？」
「これはどういうことかな？」
俺は何故か朝早く揚羽に連れだされ幼稚園にやってきた。そして眼の前には子供たちが走り回っている。
「どうもこうも、子供たちと遊んでくれ」
「何故？」
「いや、実はなここの幼稚園は今日開業した所なんだよ」
「うん」
「でもな、何かの手違いがあったみたいでここを担当する先生たちは後一週間はしないとこないらしい。んで、困った園長は爺に相談したら、その時、たまたま暇にしていた私が駆り出されたんだ」
「じゃあ、姉さんがこの子達の相手をすればいいでしょ」
俺はそういうと、揚羽が俺の肩に手を置いた。
「大河、実はな私は子供がすごく苦手なんだ」
揚羽は真剣な表情で言ってくる。
「うん」
「だから、後は任せた」
そしてさっさと逃げ出した。
「ふ、ふざけんな！！」
そして、俺はその後ろ姿をみながら叫んだ。
「くそー、こうなったらあいつらも巻き込んでやる」
俺は携帯を取り出し、いつものメンバーに電話した。そして、その後、しっかり聖純院にも電話をしといた。
「そんじゃあ、とりあえず役割分担するぞ。鈴と優燈、渚は子供た

ちの世話を頼む」
「うむ」
「わかった」
「イエッサー」
「龍と剛、透は主に雑用」
「へいへい」
「あいよ」
「うん」
「音葉は俺と一緒に昼飯を作ること」
「わかりました」
俺はいつものメンバーを呼び、訳を離し、役割分担をした。
「異議あり」
優燈が手を上げながら言ってきた。
「とりあえず聞こう」
だいたい予想つくけどな。
「なんで、大河と音葉が2人っきりで料理担当なの？」
「適任適所だからだよ」
「なら、私も」
「そうしたら、渚と鈴の方が人数不足になるだろ」
「なら、音葉を子供の方にすれば万事解決」
「お前が作る料理はすべて爆発するだろ」
「うっ！」
優燈は俺の一言で精神的にダメージを受けた。
「ほら、子供たちが待っている。みんな早速動いてくれ」
俺の指示で全員、行動し始めた。

〜俺と音葉の場合〜
キッチンで俺と音葉は今日の昼の献立を決めていた。
「無難にカレーにするか」

「カレーですか？」
「ああ、簡単だし子供たちにも人気だからな」
「そうですね。味付けは甘口にすればいいですしね」
「じゃあ、カレーにするか」
「はい」
俺と音葉は早速カレーを作り始めた。
まず最初に、野菜を洗い皮むきをして食べやすい大きさに切らないとな。
「大河さん。人数も多いですし、あれでやっちゃいましょう」
「ああ、あれか」
まあ、簡単だし。いっか。
「それじゃあ、やるぞ」
「はい」
音葉はどこからかクナイをだし構えた。その足にはゴミ袋が入った段ボールが一つに大きいざるが三つ並んでいた。
そして俺の前には今から洗う野菜がたくさん水に浸かっていった。
「よーいどん」
俺は開始の合図と共に野菜を洗い始めた。そして、洗い終わった野菜を音葉に投げる。
「はっ」
音葉は投げられてきた野菜を、クナイを使い眼に見えぬ速さで皮剥きし一口サイズに切りざるに落としていく。しかも、きちんと人参、ジャガイモ、玉ねぎとざるに分けて言っている。
「ほっ、ほれ、ほい」
俺は洗い終わった野菜を次々に音葉に投げていく。
「はっ、ほっ、よっ」
音葉は焦らないで全部切って行く。
かなりのコンビネーションだ。
こうして、俺達は野菜を切り終わり次の調理に移った。

～鈴と渚と優燈の場合～
「～♪」
部屋にメロディーが流れる。音の出所はオルガンからで弾いているのは渚だった。
「ふう、どうだ？いい曲だろ」
「お姉ちゃんすごいー！！」
渚が弾き終わると子供たちがオルガンの周りに集まった。
「ふふふ、そうだろ」
渚は子供相手に胸を張っていた。
「渚にこんな特技が合ったなんて驚きだ」
優燈は子供達と折り紙を折りながら驚いていた。
「ふふふ、他にも水泳、バイオリン、トランペットなどができるぞ」
「あっそ。はい。鶴ができたよ」
優燈は興味なさそうにいい、折り終わった鶴を子供に渡した。
「ありがとう」
子供は嬉しそうにそれを受け取った。
「く、こいつ」
「お姉ちゃん、『ドングリころころ』を弾いて」
「え～、『シャボン玉』いい」
「ああ、わかった。順番に弾いていくからな」
渚は少々優燈にイラつきを感じたものの子供たちが次々とリクエストしてきため、優燈に後で覚えていろと思いながらオルガンを弾き始めた。
「ところで、優燈」
「ん？」
「鈴はどこにいるんだ？」
「鈴ならグランドにいるよ」
「どれどれ」
渚は優燈に言われて、オルガンを弾きながらグランドの方を見て

みた。そしたら、男の達が数人走り回っていた。
「ん？いないぞ」
「よく見て。男の子達の中に混じっているから」
「ん～・・・・・・あ、本当だ」
渚はもう一度、男の子達の方を見た。そしたら、その中にポニーテイルの女の子が走り回っていた。
「よし、今度はあたしが鬼だぞ。みんなにげろ」
「「「「「わー」」」」」
鈴の掛け声と共にみんなして走り回った。
「あれじゃあ、どちらが子供かわからないな」
「渚の意見に同感だね」
そんな景色を見守りながら優燈と渚は自分の仕事をこなしていった。

子供の世話は大変だ　後編（前書き）

後編といいながら、優燈の話になっています

子供の世話は大変だ　後編

龍・剛・透の場合

「それで、雑務って言っても何をすればいいんだ？」

剛は似合わないエプロンをつけながら言った。

「とりあえず。ここの段ボールの中身を全部取り出し、その荷物の整頓と、子供たちが使う布団とかの準備だな」

「了解」

「なら、さっさと終わらせよう」

こうして、3人仕事をやり始めた。

「ふう」

それから時間が経ち、昼食も済ませて子供達はお昼寝の時間になったので昼寝に入ったので、俺はとりあえず一休みに入った。

「お疲れ様」

そしたら優燈がお茶を渡してきてくれた

「ああ、ありがとう。ところでみんなは？」

俺はお礼を言い、お茶を受け取り聞いた。

「みんな疲れて、子供達と一緒に寝ているよ」

「お前は疲れていないのか？」

「私は本を読ましてあげていただけだから、そんなに疲れていないんだ」

「そっか」

「大河は疲れていないの？」

優燈は心配そうに聞いてきた。

「俺はあまり疲れていないし。それに今からおやつを作らないといけないしな」

「そうなんだ」

「ところで、どうだった？子供の世話をしてみて」
「大変だった。でも、楽しかった」
「そう、よかったな」
「うん。将来の勉強になったしね」
ん？なんか嫌な予感がするな。
「これで、大河との間に子供ができても大丈夫」
優燈はそう言って顔を赤くしながら近づいていきた。
「さて、おやつでも作ろうかな？」
俺は優燈から逃げるように立ち上がった。
「駄目。逃がさない」
しかし、優燈に抱きしめられた。
「離せ」
「嫌だ。それで、大河は、子供は何人が欲しい？」
「なんか話がかなり飛んでいるんだけど、気のせいか？」
「ちなみに、私は三人がいいな」
無視されました。
「おい、優燈。俺はまだお前と付き合う気はないぞ」
「あ、でも、大河がもっと欲しいなら私がんばるよ」
駄目だ。こいつ、人の話を聞く気がないみたいだ。
しょうがない。とりあえず、戻すか。
「おりゃ」
「痛い」
俺は軽く優燈の頭にチョップをした。
「もう、何すんの大河」
優燈は頭を押さえながら見上げてきた。
「どうやら、正気に戻ったようだな」
「ん？なんのこと」
やっぱり、殴って正解だったな。
「ほら、そろそろおやつを作らないといけないから離れよ」
「あ、うん」

優燈はすんなり離れた。
「さて、何を作ろうかな？」
「大河、私も手伝うよ」
「ああ、ありがとう」
俺と優燈はキッチンに向かった。
「それで、大河。さっきの続きなんだけど、子供は何人欲しい？」
キッチンに向かう途中、聞いてきた。
こいつ、覚えているんじゃねーか。
「それって、答えないと駄目？」
「もちろん。将来の参考の為に必要」
俺にとって必要ないんだけどな。
「それで何人？」
「・・・・・そうだな。とりあえず、３人でいいんじゃないのか？」
「３人？」
「ああ、俺の家（琥牙寮）って結構、空き部屋があるだろ。そのせいで、少し寂しい感じがするだろ。だから、その空き部屋が埋まるほどの子供たちがいれば、寂しくないと思うんだ。だから３人」
「そう、なら、私、がんばるね」
「・・・・だから、俺はお前と付き合うのはわからないぞ」
「なら、振り向かせて見せる」
「がんばれよ」
俺は他人事かのように言った。
「うん、がんばる」
優燈はここに決意するのであった。
そして、キッチンに着いた俺達はおやつの準備を始めた。

子供３人、私、がんばるからね。　ｂｙ　優燈

どっちを選んでも嫌な予感しかしない

今日は待ちに待った運動会。
「あー、これから翡翠学園の運動会を始める」
校長が舞台の上で宣言した。
「ふあー」
俺はやる気なさそうに欠伸をしながらその光景を眺めていた。
「大河、やる気なさそうだな」
俺の欠伸を見て、しっかりと頭にハチマキを巻いている渚が聞いてきた。
「うん、ないよ」
俺は正直に答えた。
「そういう、お前はやる気があるな」
「もちろん。勝負なんだから勝ちたいだろう」
「そうか、がんばれ」
俺は適当に渚に言葉をかけておいた。
「それでは、選手のみなさんはそれぞれの待機場所にいどうしてください。プログラム一番、男子１５０Ｍ走にでる選手の人はスタート位置に移動してください」
アナウンサーの指示の元、俺達は全員行動し始めた。

「よお、大河」
「あ、姉さん」
俺が待機場所で自分の席に座っていると、揚羽がやって来た。
「なんだやる気なさそうだな」
「そりゃあ、俺の場合ほとんど出れないからね」
「あ～、お前も爺から注意された口か」
そう、俺は運動会が始まる何日か前に煉磨に『お主はみなとレベ

ルが違いすぎるから、競技に出るなとは言わないから、少し力をセーブしてくれぬかの？』と言われたのだ。
「うん。そうゆう姉さんも？」
「ああ、私が出れば女子が可哀想だとも言われたよ」
うん。そりゃあ、爺さんに同意見だ。
「それで、大河。お前はどの競技に参加する予定なんだ？」
「借り者競走、騎馬戦、棒倒し、鬼ごっこ」
「なんだ。ほとんど私と一緒じゃないか」
うわ～、ますますやる気がなくなった。
「まあ、とりあえず。頑張れよ」
「うん。そうするよ」
揚羽はそう言って俺から離れて行った。

それから時間が流れていよいよ、俺が出る借り者競走の競技になった。
「ルールを説明します。スタートして、机にある封筒をどれか選び中に、入ってる紙に書かれている人物を探して、その人と一緒にゴールするだけです。なお、書いてるのは人物だけとは限りません。物の名前が書いているかもしれませんし、パフォーマンスが書かれているかもしれません。ちなみに去年には、そのおかげで告白をした人もいますので。そこら辺は配慮してください。あと、同じ人同士が書かれた場合は早い物勝ち、または奪ってください。それではそろそろスタートします。」
アナウンサーが長々と説明し、俺はそれを聞いて大丈夫なのかと不安になったが、他の生徒達と一緒にスタート地点に立った。
「それでは位置について、よーい・・・・・ドンっ！」
「死ねえええええ、大河」
そしたらいきなり、俺の両隣りの奴らが殴りかかって来た。
「あほか」

「あぐっ」
「ふぐっ」
俺はそれらをいなし、前のめりになった、両者の後頭部を掴み、顔と顔をぶつけせた。
「まずは、2人」
「おっと、いきなり、琥牙大河を最初に蹴散らそうとした男性2人が返り討ちに遭ったあったぞ」
「おい、アナウンサー、これってありなのか？」
普通はなしだろ。
「ありです。ぶっちゃけ、この借り者競走はなんでもありなので、いきなり、選手を狙ってもいいのです。ちなみに、琥牙大河選手の場合はレベルが違いすぎるので、正当防衛以外は手を出さないでください」
「それって差別だ」
「文句を言うなら、強くなりすぎた自分に言ってください。それより、早く走ってください。失格にしますよ？」
「ちっ」
俺は舌打ちをして、さっさと走り始めた。
机の所に着くと、さっそくどの封筒にするか選んだ。
まあ、俺はどれでもいいんだけどね。そこで、俺は適当に封筒を取ろうとした。
「あ、琥牙選手。お待ちください」
そしたら、アナウンサーに止められた。
「今度はなんだ？」
「あなたにはあなた専用の封筒がありますから今お届けします」
とても、嫌な予感だするんですけど。
俺は係りの子から封筒を受け取り、紙に書かれている文字を確認した。

以下の者たちを連れてゴールせよ。

・巫女　付属品　メガネ
・メイド　付属品　猫耳
・武人　付属品　スパッツ
・水着を着ている少女　付属品　浮輪
・浴衣　付属品　団扇

「ふざけんなあああああ！」
俺は紙を呼んで叫んだ。
「こんなの無理だろう」
「衣装はこちらで用意するので、似合いそうな人を連れて来てください」
「だから、無理だって」
「文句が多い人ですね。わかりました。なら、こうしましょう。もう一枚、その机の上から選んでください。そして、その内容と今の内容を比べてどちらかをやってください。これなら文句ないでしょ」
「ああ、ない。それじゃあ、これだ」
俺は机の上から一枚、封筒を選び、中から紙を出し内容を黙読した。

ゴール前で次のことをしてゴールしてください。

・自分の意中の女性を連れて、告白しなさい。そして、ＯＫならどこでもいいのでキスをしてください。

もう、棄権していいですか？
俺は本当に思ってしまった。
「なあ、これって引き直しって」
「駄目です。それだと、くじ引きの意味がありません」

ですよね。
「さて、どうしますか？今、引いたものにしますか？それとも、さっきの奴にしますか？あと、両方にしますか？」
「いや、それは遠慮しとく」
「なら、早くどちらかを選んでください」
アナウンサーが急かすように言ってくる。
さて、どっちにしよう？

借り者競走の点検の筈だったんだけどな？

「ゴール」
俺はゴールのテープを切った。
「はい、では紙を出して点検するから」
「ほれ」
俺は係りの者に自分の選んだ紙を渡した。
「うん。はい、ＯＫ」
係りの者はチェックをし、ＯＫを出してくれた。
「さて、係り員もＯＫをだした事だし、大河選手がどちらを選んだのか発表したいと思います」
今、思ったがこのアナウンサー、俺ばかりひいきしていないか？
「さて、紙もこちらにきたので発表します。大河選手が選んだのはこちらです」
ドンっ！
アナウンサーが言った瞬間、グランドのフィールドに土煙が舞った。そして、土煙が徐々に晴れてくるとグランドのフィールドに５人の少女が立っていた。
「大河選手が選んだ者は「以下の五人を連れてゴールせよです」でも、時間も時間なので着てくれればＯＫとしました。それでは、確認の為にまず、巫女服の人から自己紹介と一言をお願いします」
アナウンサーはもうノリノリ進行させていく。
「はい。二年Ｆ組　聖純鈴です」
鈴は髪飾りの鈴を鳴らしながら巫女を服を着て、メガネをかけて挨拶をした。
「えっと、あたしと一緒におみくじを引きませんか？」
「「「「「「引きたいですっ！！！」」」」」」
鈴が手を組んで周りの者たちに聞いたら、突然周りの者たち（主に男子）が叫んだ。

「おー、さすがは鈴さん男子の心をグッと掴んだ発言だね。それじゃあ、次にいってみよう」
「え、あ、はい。一年A組、宇羅夜音葉といいます」
メイド姿で頭に猫耳を付けた音葉が挨拶をした。
「ご主人様、わ、私に奉仕をさせてください」
音葉が顔を赤くしながらそのセリフを言った瞬間、何人かの男子が腰を引き前屈みになってしまった。
「おーと、今のセリフで興奮した生徒がいるぞ。でも、本気にするなよ。これは、あくまで演技なんだから。それじゃ、三人目だ」
「二年F組　朝瀬優燈」
優燈は水色を基本にした水着で現れた。そして、座り込みみんなに背中を向けてこう言った。
「私の体の隅々にこの白い物を塗ってちょうだい」
優燈がその言葉を口にした途端、殆どの男子がどこかにいなくなってしまった。
「おや、男子が何人かいなくなりましたね。なんででしょう？しかし、優燈さんの発言は犯罪すれすれですね。しかし、なんで大河選手に頼まれた人達は全員、男の心を掴むセリフばかりをいうんでしょう？・・・・・まさか、大河選手に毎日、言わされているのでしょうか？」
「そんな、わけないだろう！！」
俺はアナウンサーに向けて叫んだ。
「冗談ですよ。さて、あまり時間も無くなって来たので四人目にいきましょう」
「二年F組　祈植渚だ」
渚は朝顔の模様がある浴衣姿でいつもの木刀の代わりに団扇を持って登場した。
「さて、今まで男の心を掴むようなセリフを言ってきましたが、渚さんは何て言って男の心を掴むのでしょうか？私、女性なのにかなり興奮しているんですけど」

もう、目的が変わっていないか？
「君の手で私の浴衣を脱がしてほしい」
「「「「「「キッターーーーーーー！！！！」」」」」」
会場のみんなが叫んだ。やはり、美人に言われれば誰でもそう叫ぶだろう。
しかも、渚とくりゃ最近、男女問わず揚羽の次に人気が出て来ているからなおさらだ。
「ぜひ、今日の夜に私の手で湯がさせてください」
おーい、アナウンサ。公私混同になっているぞ。
「あ、すみません。自分を見失っていました。では、最後になります。どうぞ」
「んー、大河に頼まれたとはいえ、何故、私がこんな姿をしないといけないんだ？」
ナース姿の揚羽はやる気なさそうに出てきた。。
「仕方がないですよ。大河さん必死でしたし、それにこれに出る代わりになんでもゆう事を一つだけ叶えてくれると約束したんですし、いいじゃありませんか」
音葉は揚羽にそう言った。
そうなのだ、俺はこの五人に衣装を着てくれと頼んだ時に、条件として一人につき一回だけゆうことを聞くと言ったのだ。
・・・・・俺、体持つかな？
俺は今頃になって後悔してきた。
「まあ、それもそうか。なら、キチンとやらないとな。三年Ａ組聖純揚羽だ」
揚羽は腰に腕を当て堂々と宣言した。
いや、その前に堂々と宣言するナースはいないと思うぞ。
「うーんと、後、一言言えばいいんだよな。そうだな、みんなしてすごいセリフを言ったし、私も頑張ってみるか」
揚羽は少し考えて言い始めた。
「せ、先生、わ、私に大きい注射をしてください」

揚羽が色っぽくそのセリフを言った瞬間、グランドに赤い液体が飛び散りグランドを赤く染めていく。要するに鼻血である。
「はあ、はあ、もう、駄目。私、何かに目覚めてしまいそうです。むしろ、目覚めたい。揚羽さんに大きい注射をされたいです」
すみませ～ん。ここに痴女がいます。
つか、この収拾をどうするかって今の問題だな。
俺は周りを見ると、息が荒い者、前屈みになっている者、どこかに行こうとしている者、鼻血を流している者が、多々いた。
まだ、運動会の競技が残っているのに大丈夫かな？
俺はそんなことを思いつつもこの惨状を目のあたりにしていた。

騎馬戦を面白くしよう

「えっと、続きまして午前最後のプログラム、騎馬戦です。選手の人はスタート位置に集まってください」
「おっ！とうとう、私の出番だな」
そう言って揚羽が立ち上がった。
「姉さん、やる気十分だね」
「当たり前だ！騎馬戦だぞ。相手を殴り放題なんだぞ」
「いや、騎馬戦は相手を殴っちゃ駄目だから」
「え、そうなのか？」
揚羽は信じられない顔をしていた。
この様子だと毎回殴っているようだな。
「そうだよ。騎馬戦は自分のハチマキを護りながら相手のハチマキを取るゲームなんだから。殴っては駄目です」
「そんなのつまらないな。・・・・・よし、ちょっと、審判の所に行ってくる」
「え？なんで？」
「面白くするためだ」
揚羽が微笑みながら言ってきた。俺はその頬笑みを見てとても嫌な予感がした。

「姉さん」
「ん？」
「これはどういうこと？」
何故か俺一人で騎馬戦の馬部分をやり、俺の肩の上に騎士役の揚羽が立っていた。そして、俺達の目の前にはこの騎馬戦に参加するであろう生徒達がいた。
つか、生徒達すごい鼻息や呼吸が荒いし、目もぎらついているな。

「今、アナウンサーから説明があるから少し待て」
「あー、それではルール説明をします」
そしたら、丁度よくアナウンサーが説明を始めた。
「先ほど、三年の聖純先輩がとても面白いルールを提案してくれたので、そちらでいきたいと思います。ルールは簡単、聖純先輩の騎馬VS騎馬戦に参加する人達です。しかも、殴りあり蹴りありです。はっきり言えば、なんでもありです。勝敗のつけ方はいつもの騎馬戦と同じ、ハチマキを獲られるか地面に落ちたら負けとします。質問はありますか？」
「帰っていいですか？」
俺は真っ先にアナウンサーに向かっていった。
「他にありますか？」
アナウンサーは俺の発言を無視した。
「なんで、俺が一人なんだ！！」
「そちらの方が、ハンデがあっていいからです。あ、ちなみに大河選手もハチマキを取られれば失格なのでご注意ください」
いや、ハンデはもう全校生徒を全員相手にするので足りているから。
「では、そろそろやりたいと思います。位置について、よーい、ドンっ！」
「「「「うおおおおおおっ！！！」」」」
アナウンサーの合図と共に、生徒達が一心不乱に俺に向かって走って来た。
「よし、大河。思う存分暴れるがいい」
揚羽は俺の上から命令してきた。
「だから、姉さんルールわかっている？」
「ああ、もちろん。要は地面から落ちなければいいのと、ハチマキを取ればいいんだろう」
「まあ、そうだね」
「よし、ならとっとと始めるぞ」

揚羽はそう言って、俺を土台にして思いっきり跳ねた。
「大河、前に１０秒でお前の足で二十歩の地点。騎馬どもを蹴散らして来い」
はあ～、本当に勝手な人だな。
「「「「「おおおおおお」」」」」
１０
そして、段々と騎馬達が俺にめがけてやってくる。
「んじゃ、俺もやりますか」
そして俺も行動し始めた。
９
「琥牙流奥義　山崩し」
そして、体を低くして相手に向かって突っ込んだ。
８
前から来る騎馬達の足を次々と蹴って行き、バランスを崩していく。
７
「重技　突風脚」
６
そして、だいたい２０歩地点に到達した瞬間、バランスを崩した騎馬に向かって追い打ちをかけるように、蹴りを放つ。その瞬間、突風が吹き騎馬達を襲う。
５
「うわっ」
「うおっ」
その突風を受けた騎馬達は倒れて失格となっていく。
４
「大河を囲め」
そして誰かが叫んだ瞬間、俺は騎馬達に囲まれてしまった。
３
「合図をしたら一斉にハチマキを取りにかかれ」

「もう、そろそろかな？」
２
騎馬達はじりじりと俺に詰め寄るてくる。でも、俺はそこから動かなかった。
１
「今だっ！」
０
俺は相手の合図と共に両手を上げた。
「聖純流奥義　千手観音」
そして、時間ぴったしに揚羽が俺の両手に着地し、技を放ち、次々と俺に襲いかかろうとした騎馬たちのハチマキを取って行く。
「ん～、１５組は取れたかな？」
揚羽は両手に掴んだハチマキを見ながら言ってくる。
「結構、いいほうじゃない」
あと、１０組残っているのか。面倒だな・
「さて、今度はどうしようか？」
「残り１０組だから、突っ込んでみる？」
相手は俺たちと距離を取っている。
「そうするか。じゃあ、大河、今度は肩車だ」
「はあ？」
揚羽は俺が何と言ったこの人はと思った瞬間、勝手に俺の手をどけて俺の肩に太股を乗せてきた。
あ、むちむちした物が俺の顔を挿んでいる。
「さて、行くか」
「え、あ、うん。そうだね」
平常心だぞ。俺。
俺はそう思いながら、敵に向かって突っ込んでいった。
結果は言うまでも無い。
大河、私の太股どうだった？　ｂｙ　揚羽

バトルロワイアルな棒倒し？（前書き）

すみません。更新が遅くなりました。

バトルロワイアルな棒倒し？

さて、午後の部は棒倒しからだ。
翡翠学園の棒倒しは少し変わっていて、棒から相手を落とすなら何をしてもいいと言われている。何もしてもいいとは、道具を使ったり、相手を買収したり、徹底的に相手を叩きのめしたり、はたまた色気を使ってもいい。
だから、これに参加する生徒は競技終了後大抵、保健室に行っている。でも、何故、この競技が危険視されないのかというと
「さて、今年もやってきました。翡翠学園、棒倒し。さて、今年はＭＶＰに選べれるのでしょうか期待があります。なお、今年の商品はこちら温泉一泊旅行だ！しかもペアチケット。ＭＶＰの人は友達と一緒に行ってもいいし、意中の人と行ってもよろしい、また、恋人と一緒に行って熱い夜を体験してもいいですよ。さあ、みんな、このチケットの為に頑張ろう！」
「おおおおっ！！」
うわー、みんなしてやる気まんまんだ。しかし、高校生が熱い夜とか言ってもいいのか？
「さて、そろそろ始めたいと思います。皆さんは位置についてください」
アナウンサーの指示で俺はスタート位置に着いた。
「大河！！私を落とすんじゃないぞ」
棒の上から揚羽が叫んできたが無視をしよう。
「それではレディーゴー！！」
そして、競技がスタートした。
「あ、言い忘れましたけど。もし、琥牙選手を倒した人は確実にＭＶＰになれるので頑張ってください」
「なんだよそれ？いつ、そんなルールができた？」
「揚羽選手が許可してくれたのでやりました」

「姉さん！」
また勝手に。
「いや、だってお前を倒せたら私にもいい相手が見つかると思ってな」
思ってなじゃないよ。
「大河を撃ちとれえええええ！！！！」
そしたら、大半の生徒達が俺を襲ってきた。
「やっぱりこうなるんだなっ！」
俺はとりあえずこの場から逃げだした。
何故、この場から逃げだしたのかというと同じ組の奴らも襲ってきたのである。
「おーと、琥牙選手。四面楚歌になってしまいました。これだと、簡単に倒されてしまうかもしれません」
アナウンサーが面白がって俺のことを中継している。
「面倒だ。一気にやってしまおう」
俺はそう思い、一気に突っ込んだ。
まず、手始めに近くにいた選手を殴り、後ろから襲ってきた奴を蹴り飛ばし、一斉にかかってきた奴らは近くに居た奴を盾代わり使い防いだりして戦った。それを五分ぐらいやると選手の半分はいなくなった。
「さて、人数も片付けたし棒倒しの連中でもやろうかな？」
「その前に私と戦ってもらう」
そしたら、目の前に木刀を持った渚が現れた。
「おいおい、渚。俺とお前は同じ組なんだから戦って意味がないだろう」
「いや、こうゆう時じゃないとお前は私と戦ってくれないだろう！」
まあ、確かに、。
「だから、いざ、勝負」
「パス1」
渚が木刀を構えた瞬間、俺は逃げた。

「おい、こら待て」
「誰が待つか」
後ろから渚の声が聞こえてきたが、俺は無視しそのまま敵の棒の所まで向かった。途中、俺を狙って襲ってきた生徒達がいたが、戦闘不能にしておいた。
「まず、一つ」
そう言って、俺は棒に蹴りを入れて叩き折った。
「うわあああああ」
そしたら、棒に乗っていた生徒が地面に落ちた。
「おおっと、黄組の大将が棒から落ちてしまったぞ。これで、黄組は全員失格になります。あとに残った赤、白、青の人達は頑張ってください」
「さて、次はどこを狙おうかな？」
俺は赤組なので残りは白と青だけだ。
「大河あああああああ！！！！！」
「おっと」
渚が鬼の形相で俺に向かって木刀を降ろしてきたが、俺はそれをかわした。
「よくも私を無視したな」
「無視していないだろう。パス１っていったし」
「うるさい。いいから、私と戦えっ！」
渚はそう言って、木刀を振って俺を襲ってきた。
「だから、パスだって」
「そうわさせるかっ！鈴っ！」
「あいさー！」
俺はその場から逃げようとしたら、突然、鈴が俺の前に割り込んで来た。
「鈴。お前もか！！」
「もちろん。大ちゃんと戦える機会ってそうそうないし、あたしがどれくらい強くなったか知れるいい機会だもん」

そう言って鈴はトンファーを構える。
ちっ、鈴も本気か。こうなりゃ、もう自棄だ。
俺は構えた。
「おう、とうとう、やる気になったか」
「大ちゃん、覚悟」
そして、２人も武器を構えた。
「いつでも来い」
「なら、早速いかせてもらう。祈植流奥義　岩石砕き（がんせきくだき）」
渚は俺に向け、気を纏った木刀を一直線に振り下ろした。
これは素手で受け止めちゃ駄目だっ！
俺は一瞬でそう理解し、木刀を避けた。その瞬間、さっき俺がいた地点が陥没した。
おいおい、これ喰らったら、骨一本どころじゃないぞ。
「大ちゃん、よそ見しない！聖純流奥義　炎両翼（えんりょうよく）！」
そして、俺が避けたのを見計らって今度は鈴がトンファーを交互に振りながら技を放ってくる。
「ちっ、琥牙流奥義　風車」
俺は迫ってきた片方のトンファーを足で払いのけ、その勢いを利用して鈴の腹にを蹴り飛ばした。
「ぐっ」
「ごほっ」
しかし、もう片方のトンファーがそのまま俺の腹に入った。
ちっ、鈴のやつスピードが上がってきてる。これは、もう少し本気をださないとやばいかな？
「えへへ、大ちゃんに一発入れた」
鈴はお腹を手で押さえながら、嬉しそうに立ち上がった。
やっぱり、一発入れられたおかげで風車の勢いが無くなって、一発ＫＯは無理だったか
「ふむ、鈴に負けていられないな。今度は私が大河に一発入れない

とな」
そう言って、渚が木刀を構えながら距離を縮めてきた。
「やれるもんなら、やってみろ」
俺はそのまま渚を返り討ちにしようと構えた。
「琥牙流奥義　地爆（じばく）」
「祈植流奥義　三羽烏（さんばがらす）」
俺は渚の地面を思いっきり蹴りあげようとした。
「あまいな」
しかし、そこには渚はいなかった。
どこに行きやがった？
俺はすぐに気配を探った。
「後ろっ！」
俺は後ろに向けて蹴りを放つ。
「があっ」
そして、その蹴りは後ろで木刀を俺に向けて振りおろそうとした渚に当たった。
「なっ」
俺は驚いた。蹴りが当たったと思ったらそこには渚がいなかったから。
「もらった！祈植流奥義　啄木鳥（きつつき）」
そして、いつの間にか俺の懐に入った渚は俺に向けて木刀を突いた。
当然のごとく、俺はそれを避けることができずに胸を思いっきり突かれてしまった。そして、そのまま後ろに吹っ飛び、別の組の棒に当たってしまった。
「よっしゃあ！」
渚はガッツポーズをする。
「やったね。渚」
「ああ、鈴もやっと大河に一発を入れたな」
「うん。修行の成果がでたよ」

２人してとても大喜びだった。それを見た会場にいる人達もなんだか嬉しそうに微笑む。しかし、その中で一人だけ喜ばない奴が一人いた。もちろん、それは俺のことだ。
「姉さん」
俺は棒の上で座って静観していた揚羽を呼ぶ。
「ん？」
「重りを外してもいい？」
「ほう～、お前が自ら重りを外そうとするとは、あの２人そこまで成長したのか。喜ばしいことだな」
「だね。で、いい？」
「好きにしろ」
「わかった」
俺はゆっくり立ち上がり、両手両足の重りを外した。
「ふむ」
久々に自ら外したな。まあ、あの２人がここまで成長したのは喜ばしいことだよな。でも、これで。
俺は俺の横に立っている棒に向けて、裏拳をかました。その瞬間、棒が真っ二つに折れ倒れてしまった。
「少しばかり手加減しなくてすむな」
俺の前には今の棒が折れるのを見て、武器を構え直した鈴と渚がいる。
２人はそれぞれ真剣な表情になった。
どうやら、俺の雰囲気が変わったのを感じたらしい。
「タイムアップまであと五分です。みなさん頑張りましょう」
アナウンサーからその声が聞こえてくる。
五分。
「じゃあ、その時間内で楽しみますか」
そして、俺は２人に突っ込んだ。

やばいやりすぎた（前書き）

今回の後書きの時にアンケートみたいなものをやりたいと思います。

やばいやりすぎた

「おらあああっ！」
俺はまず最初に鈴にとび蹴りを放つ。
「くっ」
鈴はそれを両方のトンファーでガードする。
「おら、おら、おらあああああ」
「くうううううう」
俺はそのままトンファーに向けて何度も蹴りを放つ。鈴はそれを受け止めるしかなかった。
「はあああああああ」
俺が鈴に蹴りを放ち続けていると俺に向けて木刀を振り下ろしてきた。
「おっと」
俺はトンファーを足場代わりにして、その場からジャンプをし木刀を避けた。
「今度は私が相手だ」
渚は一気に距離を詰め、至る所から斬撃を浴びせてくる。
「いい太刀筋だが。今の俺には通じないな」
俺はそれをすべて避けた。
「ならこれならどうだ。祈植流奥義　三羽烏」
そう言って、渚は俺に向けて木刀を振り下ろした。
「俺に同じ技は通用しない」
俺はその木刀を避けないで振り返った。
「そこだっ！」
そして、誰もいない空間に向けて蹴りを放つ。
「ぐっ」
そしたら、誰もいなかった所から渚が木刀を構えながら現れた。
「言っとくけど、俺は一度見た技はすぐに把握して、対象法を考え

てしまうんだよ。だから、俺を倒すなら新しい技でやるんだな」
「なんかムカつくなその言い方」
「お前の気のせいだ。それじゃ、今度は俺の番だ」
俺は構え、気を足に集中させ。
「琥牙流奥義　爆流脚」
踏み込みと同時に一気に気を爆発させた。
「おらっ」
「くっ」
渚との距離を一瞬で詰め蹴りを放つ。渚は木刀でガードするものの勢いに耐えられなく木刀が弾け飛んだ。
「俺の攻撃はまだ終わらねえよ。重技　鎌脚（れんきゃく）」
そして、渚の脇腹に蹴りを入れて吹っ飛ばした。
「がはっ」
渚は地面に倒れたまま動かなくなる。
・・・・・やばい、やり過ぎた。
「隙ありっ！聖純流奥義　火霊（かれい）」
俺が一瞬、気が抜けたのを見計り鈴が後ろから攻撃してきた。
「タイミングはいいがそう何度もやられるかよ」
俺はます、後ろに向けて蹴りを放ち、トンファーの軌道をずらした。
「なっ」
「時間もないから少し強めの技いくぞ。琥牙流奥義　伝々太鼓（でんでんたいこ）」
トンファーをずらされたことに対し驚いている鈴の懐に入り、まずお腹に一撃を入れ、腕を引く力を利用してもう一撃をいれ、また、腕を引く力を利用して一撃を入れる。もう、その繰り返しだ。
「ラスト」
俺は最後の一撃を入れるべく体を捻り、一気に勢いをつけて鈴のお腹に一撃を入れる。
「がはっ」
鈴はそのまま吹っ飛び、敵チームの棒に背中をぶつけ、そのまま

地面に倒れてしまった。鈴が棒に当たってしまったせいか、相手側の棒はそのまま後ろに倒れてしまった。
「おっと、ここで相手側の棒が倒れてしまい、試合が終了いたしました」
あ～、そういえばこれ棒倒しの競技だったよね。すっかり忘れていたよ。
「勝者は赤組みに決まったことなので。選手のみなさんは自分の席にお戻りください。なお、琥牙選手はきちんと責任を持って、鈴選手と渚選手を保健室に連れて行ってください」
そりゃあ、そうだよな。俺も思わず本気を出してしまったから今日はこの2人は無理だろう。
「大河、私も手伝うよ」
俺は重りを両手両足につけていると優燈が近づいてきた。
「ああ、ありがとう」
「それで、どっちを運べばいいの？」
「そうだな」
「なんなら、私を運べばいいよ」
「いやいやいや、怪我人でもない奴を保健室に運んで意味ないから」
「意味はあるよ。私が大河に保健室まで運ばれたらそのままベットイン」
「なんでや」
俺は優燈の頭を軽く叩いておいた。
さて、俺は誰を運ぼうかな？

やばいやりすぎた（後書き）

みなさん、こんにちわ。専学です。
前書きでも宣言した通りに少しばかりアンケートをしたいとおもいます。その内容は、大河が誰を運ぶかでルートを決めようです。

選べるのは次のようになります。
1. 鈴を保健室に運ぶ。
2. 渚を保健室に運ぶ。
3. いや、ここはあえて優燈でしょう。

応募方法はメールや感想などで応募ください。期限は一週間です。
みなさん、よろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3101l/

琥牙寮の愉快な仲間達

2010年10月8日12時27分発行